

# 蓮如における教団形成について

加 藤 智 見

親鸞は「如来よりたまはりたる信心」という信仰の形態を発見した。このような信仰は人々にとって一見容易に得られるかのようなものであるが、しかし実際には、これを獲得することは容易なことではない。親鸞が血のでるような二十年の求道を通して到達した境地でもあるからである。事実親鸞の死後、すぐに異端がはびこり始めた。

この異端に対抗し、親鸞の正しい信仰を身に具し、しかも未曾有のスケールをもった大教団にまで育てあげたのが、本願寺第八代留守職蓮如であったことはよく知られることである。そこには蓮如のどのような信仰が伏在し、どのような教団形成への発想と論理、および人心の掌握法が隠されているか。

本稿では主として出口滞在、山科本願寺建立の時期を取り上げ、以上の問題を検討したい。この問題に関しては彼の全生涯を問題にすべきであるが、あくまで仮の論考である。

## 一

文明七年（一四七五）八月、船で吉崎を後にした蓮如一行は、一日で小浜に着いた。当地の天台宗妙光寺に入ったが、ここにも門徒たちが集まったといわれる。この寺に三カ月ほど滞在し、丹波づたいに摂津の国を通り、河内国の

出口の草坊にとどまることになった。三年近く、ここを本拠地にすることになる。御文には簡単に触れられている。

「若狭之小浜に船をよせ、丹波つたひに摂津国をとをり、此当国当所出口の草坊にこえ、一月二月一年半年と過行ほどに、いつとなく三年世の春秋を送し事は、昨日今日のごとし」<sup>(1)</sup>

この草坊は、この地の在家門徒で「頭に乱杭はふるゝ共、仏法の御難はつかまつり候まじ」<sup>(2)</sup>と言ひ、蓮如を感動させた光善が建てたといわれる。後にこの草坊は彼の名にちなんで光善寺と名づけられ、順如に譲られた。長子の順如に譲られたということは、この地にあつてこの寺が重要な存在であつたことがうかがわれる。

ではなぜ蓮如はこの地を選び、とどまつたのか、この地で彼は何を見たのかを考えてみる。彼が滞在地を選ぶときには確固たる意味と理由がある。吉崎の場合もそうであつた。

出口は伏見と大坂の中間に位置し、しかも淀川の南岸に沿ひ、水陸ともに至便であり、交通、経済の要衝でもあつた。人里離れた山中に隠棲し、一人修行に励むというのではなく、だれでも思い立ったらすぐにでも参詣できる場所に蓮如はいつも活動の場を選んだ。また経済交易の途中に気楽に立ち寄れるような場、蓮如自身がいつでもどこへでも布教に出られる場を選んだ。摂州・河内・大和・和泉のどこへ行くにも便利な場所である。山間の聖地に参詣を要求するのではなく、自らの足で人々を信心の道に入れようとしていたのであり、ここに蓮如の面目があることを確認しておきたい。

蓮如が当地にとどまることにより、門徒は急激に増え始めた。しかしその門徒たちを見ると、必ずしも正しい信心をもった人々ばかりではなかつた。異端的な人々も多かつた。出口でも異端との戦いが再開されねばならなかつた。ではどんな異端の徒がいたのか。

この頃の御文を見ると「あさましく」、「言語道断の次第なり」というような言葉が多い。なぜか。文明九年三月の御文を見ながら考えてみよう。まず近在の門徒を見まわすと、真実の信心を知らずたまたま縁側の端か障子の外で

聞いた程度のことを人にすすめ、しかも自分以外に真宗の正しい教えを知っている者はないと思いがっている。「撰津国河内大和泉近江五ヶ国のうち、仏法者と号する中に、当流法門を讃嘆し、行者を勧化するともがらを、みおぶに、さらにもて、わが一心のうへに、当流正義をくはしく分別せずして、たれ人にねんごろに相伝せしめたる分もなくして、あるひは、縁のはし障子のそにて、一往の義をもて、自然ときとり、法門の分齊にて、しかもわが身も真実に、仏法にそのころざしはあさくして、結句われよりほかには、当流の儀存知せしめたる人なきやうにおもひはんべり、これによりて、たま／＼も当流正義をかたのごとく讃嘆するひとをみき／＼ては、あながちにこれを偏執して、われひとりしりがほの風情は、大驕慢の心にあらずや」<sup>(3)</sup> この点は北陸の人々と何ら変わるところがない。さらに悪いことには、自分が本寺の使いであると偽って嘘を言い、挙げ句の果ては物を取ることを本としている、という。まさに物とり信心の姿である。「かくのごとくの所在をさしはさみて、諸門徒中を経廻して、聖教をよみ、勧化をいたし、あまさへわたくしの義をもて、本寺よりのつかひと号して、人をへつらひ、虚言をかまへ、ものをとるを本とせり。いかでか、これらの人をば、真実の念仏者、聖教よみといふべきや、あさまし／＼。まことにもて、なげきてもなげき、かなしみてかなしむべきは、たゞ、この一事なり」<sup>(4)</sup>。これが撰津や河内といった国々の仏法者の実情であった。なぜこのようなことになるのか。蓮如はその理由を示す。御文につぎのように記されている。

「抑このころ撰津河内大和泉四ヶ国のあひだにをいて当流門徒中に、あるひは聖道禅僧のはてなんといふ仁体も当流に帰するよしにて、をの／＼本宗の字ちから才学をもて当流の聖教を自見して、相伝なき法義を讃嘆し、あまさへ虚言をかまへ、当家の実義をくはしく存知したるよしをまふして、人をへつらひたらせるによりてなり、これ言語道断の次第なり」<sup>(5)</sup>。聖道門すなわち天台や真言などの僧、あるいは禅僧になった果てに真宗に転向し、勝手にそれぞれの宗派の立場から真宗の聖教を読み、正しい相伝なき法義を説いている。あまつさえ虚言をかまえ、真実の義を詳細に存知したと言ひ、へつらっている。これは言語道断の次第だ、というのである。さらにこれらの僧が、覚如が主

として仏光寺を批判して書いた『改邪鈔』を袖に入れて、真宗にない不可解な教えによって仏光寺の門徒を勧化しようとしていることを強く非難する。「結句仏光寺門徒中にかゝり、あまさへ改邪鈔を袖に入れて、まさに当流になき不思議の名言をつかひて、かの方を勧化せしむる条、不可説の次第なり。所詮向後にをいて、かくのごときの相伝なき不思議の勧化をいたさんともがらにをいては、当流門葉の一烈たるべからざるものなり」<sup>(6)</sup>。このような畿内の実態をつぶさに見ながら御文を書き、また実際に足を使って方々を歩き、真宗の教えを説いてまわった。畿内にあつてもはびこる異端の教えに怒りをもよおし、悲しい思いをしていた。

この頃、畿内から離れた三河の国に秘事法門の異端が出現した。このことについて文明九年の御文に触れられている。「文明七八年之ころ、参河国野寺同宿に誓珍備前、伊勢国香取浄賢子安田主計助に秘事法門さづけたる趣は、吉崎にてひそかにつたえ申すなりとて、其詞にいはいはく、仏性と我心をおもはぬ間は、沈輪し、又仏性と我身のおもひ候へば、すなはち如来なりと、心得候へとさづけたり。これをもて、正理とおもふべし、如此伝へ候者をさして、滅後の如来とも信すべきなり。而間、安田此趣を相伝して、真実当流一大事秘事と心中におもふ間、此趣を又安田方より人に相伝る人数は、中嶋の等善、又新兵衛兩人につたへたり云云」<sup>(7)</sup>。三河野寺の本証寺の同宿誓珍備前という者が、秘事法門を授けた。それは吉崎にて密かに伝えるものとして、我が心を仏性と思わないうちは沈淪して救われることなく、我が身を仏性と思うときにはすなわち自身は如来であると心得よ、というものであった。しかし蓮如によれば、親鸞においては仏性は如来によって開顕されるものでありその時初めて如来と等しくせしめられると説かれているのであり、自身の心がそのまま仏性であると思うことは思い上がり以外の何ものでもなく、ましてその人がそのまま如来であることは明らかに異端である。この点をきびしく戒めているのである。三河門徒を指導していた上宮寺の如光はすでに十年ほど前に死去していた。すぐれた指導者を失うと正しい信心も単なる欲望の道具に墮しがちであることを身に染みて感じたことであろう。遠く離れた出口にあって蓮如は心を痛めていた。出口で見たものは、この

ようなさまざまの異端であった。しかし逆に考えれば、異端が生じることは大きな生命が生きていることでもある。その生きもののもつ病や故障を直しつつ健全な育て方をしなければならぬ。正しい成長を願いながら蓮如は所要所に教団の拠点を作っていた。堺の信証院もその一つであった。

出口滞在中に蓮如は堺を再訪した。すでに文明二年（一四七〇）、つまり吉崎に行く前年の六月、当地の南庄紺屋道場の円浄に寿像を与え、十月には北庄櫛木道場の道頭、四幅の宗祖絵伝を授けていた。いずれも国際貿易に従事する豪商たちであった。堺は古くより交通の要所として商業が盛んであったが、応永の頃大内氏が堺浦に港を築き、細川氏が守護になる頃から、外国貿易が盛んになった。そのことを蓮如はよく知っていた。蓮如は常に交通の要衝と人々の集まるところこそ布教の場であることを知っていた。この地を再び訪れたのである。信証院については文明九年の御文に「干時文明九年九月十七日俄思出之間辰尅已前早々書記之訖 信証院六十三歳<sup>(8)</sup>」と記されている。

この信証院は、道頭の櫛木屋道場に蓮如自身がこの頃創立したものである。晩年に至るまでこの信証院を本拠として堺の人々を教化した。『蓮如上人御一代記聞書』には次のような姿が記されている。老体に鞭打って辛勞している姿が彷彿としている。「同堺の御坊にて、前々住上人、夜更て蠟燭をともさせ、名号をあそはされ候。その時仰られ候、御老体にて御手も振ひ、御目もかすみ候へとも、明日越中へくたり候と申候ほとに、かやうにあそはされ候。一日夜の事にて候間、御辛勞をかへりみられす、あそはされ候と仰られ候。しかれば、御門徒のために御身をはすてられ候。人に辛勞をもさせ候はて、たゞ信をとらせたく思召候由被<sup>(9)</sup>仰候」。夜更けに蠟燭の下で振う手を押さえ、かすむ目をこらし、一心に信心をとらせるために名号を書こうとする姿は、まだまだ商業というものに倫理的な罪悪感を微妙にもっていた当時の人々をも引きつけることになった。次第に真宗の教えは浸透していった。その証左になると思えるが、当時堺に住んでいた外国人も蓮如に帰依したという記録がある。『実悟記』には次のように書かれている。「荆旦<sup>クイタン</sup>国の人四五人日本にわたり、蓮如上人へまいる事あり。堺の坊に御座の折節、彼国の人一子を失いなげきて、子の向

後をも知て、仏果になし給れ、と観音にいのり奉るに、示現あらたにかうふりぬ、日本に渡り後生の向後を知べし、と告給ひければ、日本に渡、堺の津にて観音の示現のごとくたずねゆきて、縁をもとめ、蓮如上人に御勸化をうけて、ありがたき旨申けり<sup>(10)</sup>。荒唐無稽な話の感じを受けるし、当時すでに荊旦国は滅んでいたのであつて、おそらく北部中国人というような意味であり、事実としては信憑性が薄い、堺の外国人の間にも蓮如の影響が及んでいたことは推察し得る。ある意味で親鸞の教えはキリスト教に通じるところもあるからである。

いづれにしても蓮如は、激動の時代に仏法に基づく確固たる価値観を人々に植えつけていった。畿内にも一揆が頻発していた。奈良辺の門徒は山城の一揆に呼応して興福寺の塔や堂宇を炎上させた。畿内は権力の膝元であつたから、北陸のように混乱しなかつたが、再三一揆は生じた。これによつて農民や商人の意識と価値観が変化していた。このような彼らに対して蓮如は無駄で無謀な反抗を諫め、信心の人となることを説き続けた。「蓮如上人仰られ候、堺の日向屋は卅万貫持たれども、死にたるが、仏にはなり候まじ。大和の了妙は唯一をもきかね候へども、此度仏になるべきよ、と仰られ候由に候<sup>(11)</sup>」。

出口を本拠地にしての布教は二年半に及んだ。しかしその間蓮如の頭を去らなかつたのは若き日からの念願であつた教団の中心本願寺の確立という問題であつた。教団の中心としての、門徒の心の拠り所としての本願寺建立の実現であつた。仏法領の中心としての聖域と講の最高組織の確立でもあつた。畿内を歩きまわりながらその構想を練り続け、それにふさわしい場所を探し求めていた。一人一人の門徒を大切にしながら、しかも本願寺建立という大きな問題を同時に考え得るところに、また蓮如の特性があつたと考えられる。

## 二

文明十年（一四七八）一月、蓮如は出口を出て山科の小野庄野村におもむいた。

なぜ出口を去ったのか。なにゆえ山科の地を選んだのだろうか。

蓮如は御文の中に「抑当所者、山城国宇治郡山科郷小野庄野村の内西中路と云所也。然者、於此在所何なる往昔の約束ありて、不思議にかりそめながら<sup>(12)</sup>」と書いているが、もちろん「約束」や「かりそめ」が原因ではない。吉崎を選んだ時も「不図しのびいでて」と言っている。蓮如一流の書き方であり、その裏には周到な用意がなされているはずである。

まず出口退出の理由であるが、当地は「大雨しきりにて大水出て、出口村は水入れれば水底に成にけり<sup>(13)</sup>」というところであった。確かに出口は水陸共に交通の要衝ではあった。しかし伽藍を建てて永く参詣者を集めるには少なくとも自然的条件が良くなかった。湿地帯に大きな建物を建てるわけにはいかなかったのである。現に大勢の人々が集まっていたが、「水辺<sup>スイベン</sup>ふかきあしはら<sup>(14)</sup>」の地にこれ以上人を集めることは、さまざまな点で危険でもあった。

当時相当な高齢になっていた金森の道西や堅田の法住がたびたび出口で蓮如と面会した。彼らは出口が本願寺建立にはふさわしくないこと、もつと近江に近いところへ移るべきことを進言した。旅慣れた蓮如にはそれはよく分かっていた。彼らの意見を聞きながら蓮如は構想を練っていた。

まず自然的な条件が良いこと、つまり大きな伽藍の立地に耐え得て、しかも交通の至便なこと。次にその場所が政治的に問題がないことであった。弾圧を受け続けてきた蓮如にはこの点に敏感にならざるを得なかった。集まる人々に直接被害がおよぶからである。このように考えていた時、道西を通して次のような話があった。山科野村の海老名五郎左衛門という者が蓮如に帰依し土地を寄付したいと言っているというものであった。さっそくこの地を調べた結果次の事が分かった。

まず立地条件であるが、この地は陸路では東海道、東山道にも近いし、大津にも近い。水路では琵琶湖から流れ出る淀川の上流宇治川に近い。また奈良にも近く、堺等の畿内南部、さらには三河を中心とした東海地方、北陸にも連

絡がとりやすい。さらに比叡山には至近距離ではなく、当時京の都も戦乱の時代にしては、一時的に落ち着いていた。蓮如自身文明九年十二月二十九日の御文に「都は一円に公方がたになりぬれば、今の如くは天下泰平と申すなり。命だにあれば、かかる不思議の時分にもあひ侍り」<sup>(15)</sup>と記している。これらの点で門徒たちが参詣しやすい条件はそろったと言える。

次にその土地を取得する問題であるが、当時野村の地は醍醐三宝院の領地であり、門主は義覚であった。この義覚は前の將軍義政の子であった。まだ十一歳であったが、義政と蓮如の関係は以前からあった。蓮如の第四女妙宗は春日局に養われ、その縁で義政に仕え、当時は幕府の申次をしていた。その義政の子が門主であったことは都合が良かった。しかも義政の妻富子が幕府の実権を握っており、元来が日野家の出であり、後には富子自身が本願寺に直接参詣していることからして、義政と蓮如は以前からかなり密接であったと考えられる。義覚はまだ若かったから直接この問題には関わっていないだろうが、三宝院がこのような背景をもっていたことは、蓮如に心強さを与えたことであろう。しかも直接の土地寄進者が海老名五郎左衛門であることは、いづれ蓮如の継母如円の遠縁の者であり、蓮如には心強かった。このような背景を読む蓮如の態度を見て、政略家の姿を思い浮かべる人もいるかも知れないが、本願寺建立の後に集まる人々のほとんどは庶民の門徒である。何よりもその人たちの安全を考えねばならなかった。政権抗争の場所、戦場になつてはならない。できるだけ費用がかからず、通いやすく、しかも安全な場所でなくてはならない。これが庶民に布教する基本であった。これらの点に蓮如は心を砕いたのである。かくして山科の野村の地が本願寺建立の地に選定された。

六十四歳の蓮如は、文明十年一月、出口を出て山科の野村に移り、「其後、程へて先新造に馬屋をつくり、其年は春夏秋冬無幾程打暮しぬ」<sup>(16)</sup>といわれるように、堺の信証院から建物を移し、馬屋などを構えてその年をすごした。以下御文等をもとにして本願寺建立の経緯を見ていくことにする。



翌文明十一年一月からは庭園の工事、四月からは堺の坊舎を移し寢殿の造営を開始した。「正月十六日にもなりしかば、春あそびにやとて、林の中にあるよき木立の松をほりて庭にうへ、又地形の高下を引なほしなんととして、過行ほどに、三月初ころかとよ、向所を新造につくりたてゝ、其後打つゝきせゝり造作のみにて、四月初ころより摂州和泉の境に立置し古坊をとりのほせ、寢殿まねかたに作りなしけるほどに、兎角して同四月廿八日にはや柱立をはじめて、昨日今日とするほどに、無何八月ころは如形周備の体にて、庭までも数奇の路なれば、ことごとくなくれども作り立ければ」<sup>(17)</sup>。

さて何といつても蓮如の心中の奥に燃えていたのは御影堂の建立であつた。当時としてはすでに相当な高齢になつていた蓮如の悲願でもあつたが、これを察した門徒たちは同年十二月、そのための木材を吉野から運びこんだ。「いかにしても御影堂を予が存命の内に建立せしめんと思企る処に、其志ある事を門下中しりて、既に南方河内国門下中より和州吉野の奥えそま入りをして、やがて十二月仲旬ころかとよ、柱五十余本其外断取の材木を上せけり。かくて年内も打暮ぬ」<sup>(18)</sup>。

年があけて文明十二年一月、試みに三帖敷の小さな御堂を造つた。御影堂は本願寺としては最も重要な建物になるので、慎重にその模型の意味で造つたのである。「愚老はかり事に彼御影堂をつくり奉らんが為のこゝろみに、所詮小棟つくり三帖敷の小御堂をつくり侍べりぬ」<sup>(19)</sup>。二月三日、御影堂の建築に着工し、三月二十八日には棟上げにおよんだ。蓮如は喜んだ。「誠に法力の不思議にてありけるにや」<sup>(20)</sup>。門徒たちも参加した。八月四日から檜皮葺を始め、二十八日には絵像の御影を仮仏壇に安置し、その夜蓮如は堂の中に籠もつて一夜をすごした。感激の一夜であつた。「されば予か年来京田舎とめぐりし内にも、心中に思様は、あはれ存生の間において、此御影堂を建立成就して、心やすく往生せばやと念願せし事の今夜成就せりとうれしくもたふとくも思ひ奉る間、其夜の暁き方までは、ついに目もあはざりき」<sup>(21)</sup>。恵まれなかつた出生、継職の事情、比叡山の圧迫、動乱期の布教と弾圧を経てきた蓮如にあつて正に感

動の一夜であつたに違いない。

翌二十九日朝廷から香筥を賜った。

また十月十四日、日野富子がこの本願寺を訪ねたが、蓮如はむしろこちらの方を非常に喜んでいる。「御台様御成ありて、此御影堂御覧ありし事を思ひつゝくれば、前代未聞と云ながら、たゞ事とも思はず、かたじけなくも思侍べりき」<sup>(22)</sup>。朝廷からの下賜よりも富子の来臨を喜んだのは、血縁関係がある以外に、形式よりも現実を重視する姿勢が蓮如にあつた事がうかがわれる。幕府権力に睨まれることは教団と門徒を危険に遭遇させることになる。その危険を少しでも回避することになる。現に加賀の不隠な動向が彼の耳に入っていた。民衆の安全を考えるのが、当時の布教者の重要な使命でもあつたからである。

このようにして「造作は大略」終わり、「橋隠妻戸の金物」なども出来上がったので「白壁をぬり地形の高下をなおし」たりしている間に、報恩講が近づいてきた。そこで「年来大津に此十余ケ年の間御座ありし根本之御影像」<sup>(23)</sup>を山科に移すことにした。つまり蓮如が北陸へ行く時、大津近松の顕証寺に安置してきた親鸞の影像を山科に移そうとしたのである。しかしここに問題がおこつた。この影像を移すことについて三井寺から横槍が入つたのである。というのは顕証寺は三井寺の境内にあつたが、ここに本願寺の門徒たちが大勢参拝して三井寺やその周辺が大いに繁盛してゐたからである。この像を山科に移されると三井寺は困る。その辺の事情について『拾塵記』に記されている。「其故は、大津に御影像御座しかは、寺下寺中等、繁昌する事なるを、今又、山科へうつし申さるへき事、無其謂と、しきりに大衆一同にいきとほりけり」<sup>(24)</sup>。しかし住持であつた蓮如の長子順如たちが奔走して移動を可能にしたのであるが、それにしても新旧交代の感がする。三井寺ではなく顕証寺が民心をとらえていたのである。無事山科に御影像もどおり、報恩講もつとめられた。御文には、「而間、報恩講も始りければ、諸国門徒の仁同心に渴仰の思ひ浅からずして、面々に懇志をはこび、一七日中之勤行無其退転りき」<sup>(25)</sup>とある。正に蓮如にとって本懐が満たされ、これ以上のこ

とはなかった。『拾塵記』には「予、身上にをひて、本懷満足、何事かこれにしかんや」<sup>(26)</sup>と言ったと記されている。

さらに翌文明十三年に入ると、一月に寢殿の大門の立柱、二月には阿弥陀堂の工事着工、四月には棟上、六月には仮の仏壇に本尊をすえた。「当月廿二日に柱立をさせて、(中略)二月四日より阿弥陀堂の事始をさせて(中略)四月廿八日にはすでに棟上を企て、(中略)六月八日にはまづかり仏壇をこしらえて、本尊をすえ奉けり」<sup>(27)</sup>。同月にはこの新堂で父存如の二十五周忌がつとめられた。

その後御影堂の大門は翌十四年一月に立柱、阿弥陀堂の仮仏壇も改造し、六月五日には本尊を安置することができた。

さらに翌十五年八月には阿弥陀堂の瓦葺も終った。このようにして山科本願寺の建立はほぼ完成した。

前代未聞ともいえる本願寺の発展の裏には、しかし大きな蓮如の悲しみもあった。文明十年(一四七八)八月、蓮如にとつてまことに良き妻であった如勝が胎に宿る子と共に悪病のために亡くなった。わずか三十一歳であった。乱世の中北陸から出口へ、そしてまた山科へという苛酷な移動時期を共にした女性であったが、信仰の面でも非常にすぐれた人であった。蓮如にとつても大きな悲しみであった。さらに蓮如は四人目の妻宗如を娶るが、この女性も一男一女を生み、わずか数年で他界してしまった。本願寺高揚と並行してこのような精神的な苦しみにも遭遇し、彼の心が大きく振幅している点に注意しておかねばならない。人間としての苦しみ、就中女性の辛苦を身をもって感じとつていたことであろう。

山科本願寺の発展に呼応して門徒の本願寺参集はいよいよ増加したが、その中に相変わらず異解異見の徒が多かったことが蓮如を苦しめた。たとえば文明十四年十一月二十一日の御文には次のようにのべられている。「しかるあひだ、近年事のほか当流に讃嘆せざるひが法門をたて、諸人をまどはしめて、或はそのところの地頭領主にもとがめられ、我身も悪見に住して、当流の真実なる安心のかたもたゞしからざるやうにみをよへり。あさましき次第にあらずや。

かなしむべし。をそるべし」。<sup>(28)</sup> いわゆる異安心の徒がはびこり、また権力者との衝突の要素もあつた。彼は老骨の身に鞭打つてこれらの人々を諫めた。

たとえば文明十五年十一月二十二日の御文には次のように記されている。「しかれば、此ごろ諸国にをひて当流門人の中におほく祖師の定めおかるゝ聖教の所判になきくせ法門をたてゝ当流の法義をみだすこと、以外の次第也。所詮此一七ヶ日報恩講中にをひて、はやくそのあやまりをひるがへして正義にもとづくべきものなり。

一、仏法を棟梁し、如形坊主分をもちたらん人の身のうへにをひて、いさゝかも相承せざるしらぬ法門をときて人にかたり、我れものしりとおもはれんとて、えせ法門をもて人を勸化すること、近代以外在々所々に繁昌すと云々。これ言語道断の次第也。

一、京都本願寺御影前へ参詣申す身なりと云て、いかなる人の中ともいはず、大道大路にても又関渡の船中にてもはゝからず、仏法方のことを人に顕露に沙汰すること、大なるあやまりなり。

一、人ありていはく、我身はいかなる仏法を信心する人ぞ、と相尋ことありとも、しかと当流の念仏申者とはこたふべからず。たゞなに宗ともなきものなり、念仏はたふときことゝ存じたるばかりなるもの、とこたふべし。是則当流聖人のをしへまします所の仏法者とみえざる人のすがたなり。此等の趣をよくくこゝろえて、外相にその色をみせざるをもて、当流の正義とおもふべきものなり」。<sup>(29)</sup>

本願寺は親鸞の教えと精神を具現してこそ真に生きた寺になる。教えと精神を曲解しこれを人に鼓吹するところに本願寺の存在価値はない。本願寺を中心とした教団とは何か、組織を宗教的に存在させるためにはいかなる基盤を見出だすかが、山科本願寺建立を成し遂げた蓮如に改めて問題になってきた。ここに教団組織の形成の根本問題が問われることになる。

山科本願寺の伽藍が出来上がる頃になると、各地の門徒たちはただ参詣するだけでなく住居を移す人々も多くなり、次第に吉崎のような寺内町が形成されることになった。ここに庶民の生活をも含めた教団の組織の問題が生まれてくるが、まずその寺内町の模様を見ておきたい。

当時の山科本願寺の敷地は大きく分けて三つの部分から形成されている。まず御影堂・阿弥陀堂・寢殿を中心としたいわゆる御本寺の部分、次にその外の一家衆たちの住まいや多屋などのある内寺内、さらにその外側に絵師、表具商という職人に加えて餅、塩、魚、酒などを商う商人が住む外寺内の三部分である。次第に盛況になり、洛中に異ならないほどになった。しかしこのような町は、単なる門前町とは異なる。商いだけが目的ではなく、信仰に基づく連帯感が基調になっているからである。以下、その様子を実悟の著した『山科御坊事并其時代事』『本願寺作法之次第』によつて考えてみる。

たとえば時を告げ、生活を律するのに太鼓が使われた。もつとも最初その太鼓は御本寺だけで用いられたが、のちには寺内町全体に使われるようになった。町の二ヶ所に太鼓が置かれ、その打ち方にも掟があつた。「山科にては両所に時の太鼓うたせられ候し。ことに暁の七時とひるの八時をはつよく打へしと定られ、町々にとくきこえ申候て、よく候き」<sup>(30)</sup>。御本寺も外寺内も同じ掟によつて動いていることに留意しておきたい。ここに寺内町の宗教的な意味がある。また仏事などがあると魚や鳴物や吹物が停止された。「一七日御仏事ある時御門内へ魚不入候。人の音信の物にて候へ、昼は家の内へ入て夜かへし渡候、と承候。二十八日、二十五日、春秋彼岸七日の間、盆三ヶ日、同前也。當時ならば十三日同前たるへし。此日共には一切鳴物吹物乱舞の具ならさす、詠等停止せられける」<sup>(31)</sup>。信仰が生活の規範として受け取られている。「町中も御精進日は、樽のさかなにても御入候へ、御坊中又町をも持とおる事停止候き」<sup>(32)</sup>。

しかし注意すべきことは、このようなことを一方的に蓮如が強制したのではない。信仰を中心にすえ、そこから出てくる良心と良識がその基本になっている。実はここに重要な点が存在する。蓮如は觀念によつて思索し、原理のみを強制しない人格であつた。あくまで信仰が大前提になるのではあるが、日常の規範は人間の人情の機微を重んじた。だれにでも分かる心の動きを常に問題にした。つまり彼の觀念から規範が生まれるのではなく、庶民と同一の人間の心の動きから規範が生まれてくるのである。寺内町が発展するのもこのようなところに重要な原因があると思える。寺内町に住む庶民と同一の生活態度を蓮如もとつていたのである。門前町ならば商人と寺の法主は生活も規範も異なる。蓮如の心の在り方を見ておかねばなるまい。蓮如は常に「御門徒衆大切に」<sup>(33)</sup>との思いで生活した。この精神が寺内町に浸透していった。

たとえば、ある時遠国から門徒が本願寺に来たが、食事に塩辛すぎるものを出した。この時蓮如は次のような態度をとつたという。「或時遠国衆御見参の時、煮餅をこしらへ申候由申を、取よせられきこしめして御覧らるるに、塩からき事言語道断と被仰、こしらへたる人をも御折檻候て、曲言との仰也と、蓮如上人被仰付候と、実如に御物語を承候也」<sup>(34)</sup>。親鸞が言つたように信心が如来より賜つたものであれば、門徒に上下はない。蓮如の信心も遠来の門徒の信心も同じである。であれば蓮如が塩辛いものを食べたくなければ遠来の門徒もそうである。食物の点についても同朋である精神は生かされなければならない。信心を賜つた門徒の心に入り切つた心遣いを見せている。このように御本寺、内寺内に住む者も外寺内に住む者も一つ心になつていった。門前町とは違う形態が生まれるのも当然であつた。このような精神がやがて教団組織の根本になつていく。

さてこの山科時代の蓮如の言動から後の真宗の組織の在り方、習俗、作法などが定められていくことになつたが、この点に触れてみたい。この場合も蓮如の基本的姿勢は変わらない。たとえば衣については次のように言っている。「衣の色はうす墨にて、可古<sup>かこ</sup>の教信の意巧を本と御まなひにて候と也。開山聖人の仰にて、蓮如上人の御時実如上人

の御時までも、うす墨にて侍りし」。<sup>(35)</sup> さらに座る場合も蓮如と門徒は高下はなかった。蓮如以前には僧と一般門徒には上段、下段の区別があつた。しかし「蓮如上人御時上段をさけられ、下段と同物に平座にさせられ候。其故は、仏法を御ひろめ御勸化につきては上臈ふるまひにては成へからず、下主ちかく万民を御誘引あるへきゆへは、いかにもく下主ちかく諸人をちかく召て御すゝめ有へき、とての御事にて候、と被仰候て、平座に御沙汰候。ありかたき事と諸人申たるとて候」<sup>(36)</sup>と実如に語らせている。たとえ大本願寺の法主となつても蓮如の態度は変わらなかった。如来から信心を賜つて生きる一人の門徒の態度を崩していない。思ひ上がることなく、ただ人々に心を配つたのである。上からの視野でものをとらえるのではなく、一般の人間の視野と体験を通し、一般の人々に納得のいく場でさまざまな作法や決まりを形成していった。

たとえば和讃の読み方についても、次のような注意を与えている。「浄土和讃の終に帰命せよの命の字、うのかなをはりて申はわろし、うせよときこゆ、聞わろし。うのかなそとかく云へし、と仰也。加様事あまたありき」。<sup>(37)</sup> つまり「きみよう」の「う」を張つて読むと「う」と「せよ」とがつながり「失せよ」と聞こえるから、「う」を軽く読めというのである。このような思いは観念から出る原理原則を基幹とする発想ではない。繊細な心遣いから出るものである。このような立場から蓮如は人に語りかけ、その心から次第に教団のさまざまな規則を考えていったのである。たとえば次のような発言もある。「教行信証は蓮如上人の仰には廿歳より内にはよますへからず候。若時は何としても聊爾に存する間、廿より以後よますへし」。<sup>(38)</sup> 親鸞の主著であり真宗の聖典たるべきこの著を二十歳以内には読ませるべきでないというのである。歎異抄に関しても禁制をしいた。なぜか。むしろ読むべきことを奨励すべきではなかったか。私見によれば、実はそこに蓮如の氣遣いが考えられねばならないと思う。すでに私は蓮如の特性に如来をきわめて人格的、人間的にとらえている面があることを指摘した。つまり彼は如来を観念の対象にしているのではない。観念的な対象にするのならば、年齢の老弱に係はない。頭脳がすぐれていれば理解できる。しかし如来を人格的に

とらえ、「仏意」すなわち仏の意志、心、慈愛にすべての関心を注ぐ蓮如にあつてみれば、仏の思いやりが分からねばならないのである。であれば聊爾すなわち思慮が足りない理屈のみで読もうとする若い時期には読まない方がよいことになる。仏の悲願、思いやり、慈愛、人間の心遣いの温かみに彼の宗教性の根本と宗教的な規則の形成根拠が考えられるのである。このような態度は理性を基盤とする人からは妥協と受け取られるかも知れない。しかし人情の温かさを渴望していた戦国の時代の人々には「かたじけなく」感じられたことと考えられるし、人間的な人間と映ったに違いない。蓮如にとって如来の恩、親鸞への謝徳は如来の悲願、親鸞の開教によって生かされている以上当然であり、またこのような人間的な情を重んじる態度からすれば親孝行も当然の人間の使命であつた。蓮如にとって食事ができるのも如来のお陰、親鸞のお陰であつた。「蓮如上人は、御膳と被申より、はや如来聖人の御用<sup>（39）</sup>にて物をくうへきよ、被思食てよりは、御膳まいりはつるまで御忘はてられたる事なし、と御物語候つると各宿老衆被申候<sup>（39）</sup>」。仏の恩、親鸞への恩を感じる心は、自然に親への恩を感じる心を生む。「何よりも親に不孝なる人蓮如上人第一御きらひにて候。又は不信の人には蓮如上人は御見参あるましき、と明応三四年の比より被仰出されたる事に候<sup>（40）</sup>」。よく蓮如は儒教を取り入れたと言われることがあるが、私はむしろ仏意を人間の情意でとらえるところに発する恩とか孝を重要視したことが、あたかも儒教を重視したかのように考えられてきたのではないかと思うのである。このように観念ではなく、仏、親鸞の心、そして門徒の心を見据えたところに蓮如は教団形成の基盤を置いていたと考えられる。この点についてはさらに詳述しなければならないが、ひとまず以上のことを指摘しておきたい。

さて、このような蓮如の態度は人々を引きつけ、真宗他派の帰参をなさせることになった。その場合も蓮如はその人々の心を冷たく扱うことなく、彼らの心にしみ込む態度で接した。それがまた空前の大教団を形成することにもなる。今はこの点に触れてみたい。

まず「名帳」や「絵系図」を案出し、繁栄していた仏光寺についてであるが、当時仏光寺十三世であつた光教が文



明十三年に没した。彼には経豪と経誉の二人の子供がいたが、兄経豪が十四世を継いだ。しかしこの経豪は蓮如のもとに帰参することを欲していた。父の死後百日を経ることなく順如を介して蓮如のもとに帰参してしまった。その経緯は『反故裏書』に次のように書かれている。なお蓮教とは蓮如から経豪に与えられた名である。「仏光寺蓮教は父往生の砌より頻に帰参の望あり。かの門弟当流へ帰参の仁に立より順如上人へ申されしかば、則申入られ、蓮如上人めしいだし給ふ。百箇日のうちなり」<sup>(41)</sup> 仏光寺を支えていた有力な人々の大部分が経豪とともに本願寺に帰参した。蓮如は温かく迎え入れた。山科の寺内に寺を建てさせ、旧名であつた興正寺を名乗らせた。「むかしのごとく坊舎をたて、はじめの名にかへされ興正寺と号す」<sup>(42)</sup>。そして経豪と常楽寺（常楽台、存覚が開基）の蓮覚の長女とを結婚させた。「常楽寺蓮覚の聶君となし」<sup>(43)</sup>、後には一家衆に加えることになった。

次に近江の木部の錦織寺であるが、当時叡尚が兄の第八世慈範や錦織寺の門徒たちと不和になった。「其比叡尚と申せし人、門徒と不和のこと出来し」<sup>(44)</sup>。沈滞した錦織寺に絶望した叡尚の長男で十九歳の勝慧は寺を飛び出し、蓮如のもとに走った。「其子勝慧法師十九歳にして当家へ帰参あり」<sup>(45)</sup>。この寺の門徒たちが横暴であつたためらしいが、当時その大きなスケールで人々を魅了していた蓮如に新しく新鮮な魅力を彼は感じていたのであろう。錦織寺に不満をもっていた末寺や門徒もこれに従つた。やはり勝慧を温かく迎え入れた蓮如は、勝林坊を与え、娘妙勝と結婚させ、山城の国三栖に寄宿させた。妙勝は吉崎や出口で苦勞を共にし、文明十年に亡くなった妻如勝との間にできた娘であつた。「蓮如上人勝林坊とつけ申させ、則御娘妙勝所縁として城州三栖といふ所に寄宿せしめ給ふ。かの妙勝の母公は吉崎よりみやづかへせし人なり」<sup>(46)</sup>。この如勝が早く亡くなると、勝慧は大和に移り、蓮如の第十三女妙祐と再婚し、第十二男の実孝と親交を結んだ。「この妙勝御往生のちは、勝慧大和国芳野下市へこえたまふ。やがて実賢のあね君妙祐いらせ給へば、実孝したしく互に芳好ことにふかし。今願行寺と号する是なり」<sup>(47)</sup>。

さらに三門徒派の諸本山すなわち大町専修寺、誠照寺、毫摂寺、証誠寺、専照寺などもほぼ蓮如が吉崎にいた頃か

ら本願寺に転向したといわれているが、ここでは毫摂寺について取り上げてみる。吉崎に蓮如がいた時、毫摂寺の十九歳になる住持兼慶は蓮如に帰参したが、蓮如はその忠節に感ずるものがあり、上鈞坊玄秀と名乗らせた。「蓮如上人吉崎御在国の時、十九歳にして帰参し侍れば、忠節御感ありて上鈞坊玄秀と号せらる」<sup>(48)</sup>。しかしその跡を継いだ善鎮は世芸を専らにし、秘術を学んだ。そこで家司が山科に行き、帰参を望んだ。蓮如はこれを受け入れ、正闡坊という名を与えた。「かの家司<sup>かし</sup>渋谷のそれがし京都へいざなひ、つゝに山科へ引導申入れ、則帰参を望申されけるまゝ、蓮如上人めし<sup>しやうせんぼう</sup>だされ正闡坊と号せらる」<sup>(49)</sup>。そこで蓮如は寺にいた第四男蓮誓に命じ、善鎮に仏書の相伝をさせた。つまり教育させたわけである。「蓮誓<sup>れんせい</sup>在寺のおりふしなけば、御意<sup>ぎい</sup>として仏書相伝の義、其示誨<sup>じくゑ</sup>を受られしとなん」<sup>(50)</sup>。地方の大坊の子弟をこのように教育していたのである。このような場合、蓮如はよくその保護者に手紙を送った。たとえば長沼浄興寺に宛てた書状の末尾に「余長々堪忍候へば其身もいたはしく候。委細は了順可申候。必々夏中迎を可給候。可待申候。恐々謹言」<sup>(51)</sup>と書いている。親鸞も丁寧に関東の門徒たちに消息を書いた。しかし親鸞は主として正しく信心を得させるために書いた。蓮如はこのように人情の機微に触れる消息を書いたのである。すでに蓮如のような境遇になっていれば側近の者に書かせてもよかった。しかし自分で書いた。保護者にしてみれば、側近と蓮如ではまったく意味がちがう。苦勞をしぬいた蓮如にはそのあたりのことがよく分かつていた。仏の心、親鸞の心に全関心を集約していた蓮如にはわが心をわが手によって伝えなければならなかった。ここに生の人間から滲み出るものを教団の組織形成の基盤に置く態度が考えられる。これは観念的な原理原則から演繹されて出てくる方法ではない。如来への報恩の心情から生まれ出ているものである点に留意しておかねばならないだろう。

以上蓮如の出口滞在、山科本願寺建立の時期を中心に彼の教団形成の視座と態度について考えてみた。親鸞は人に説く時も求道者としての立場を崩さなかった。しかし蓮如は自己を自らが在家の人々の場と次元に置き、その次元から教団形成に努力した。ひとまずこの点を指摘しておき、詳細は他日に譲りたい。

注

- (1) 『御文』（『真宗史料集成』第二卷）二二九頁（『御文』の原文は片仮名であるが、本稿では読みやすくするためにすべて平仮名に書き改め、濁点なども施した。その責任はすべて筆者にある）
- (2) 『実悟記』（『蓮如上人行実』）一五六頁
- (3) 『御文』二二〇頁
- (4) 同右、二二〇頁
- (5) 同右、二二七頁
- (6) 同右、二二七頁
- (7) 同右、二二九頁
- (8) 同右、二二二頁
- (9) 『蓮如上人御一代記聞書』（『蓮如上人全集言行篇』）六四頁
- (10) 『実悟記』一七〇―一七一頁
- (11) 『実悟旧記』（『蓮如上人行実』）七一頁
- (12) 『御文』二四一頁
- (13) 『蓮如上人御一代記』（『真宗史料集成』第二卷）五三三頁
- (14) 『本福寺由来記』（『真宗史料集成』第二卷）六七五頁
- (15) 『御文』二二九頁
- (16) 同右、二三五頁
- (17) 同右、二三六頁
- (18) 同右、二三九頁
- (19) 同右、二三九頁
- (20) 同右、二三九頁
- (21) 同右、二三九頁
- (22) 同右、二三九頁
- (23) 同右、二三九頁

- (24) 『拾塵記』（『蓮如上人全集言行篇』）二九九頁
- (25) 『御文』一三九頁
- (26) 『拾塵記』二九九頁
- (27) 『御文』二四五頁
- (28) 同右、二四八頁
- (29) 同右、二五二頁
- (30) 『山科御坊事并其時代事』（『蓮如上人全集言行篇』）一八九—一九〇頁
- (31) 同右、一九〇頁
- (32) 『本願寺作法之次第』（『蓮如上人全集言行篇』）二二四頁
- (33) 同右、二四五頁
- (34) 同右、一三七頁
- (35) 『山科御坊事并其時代事』一八一頁
- (36) 『本願寺作法之次第』二二〇頁
- (37) 同右、二二七頁
- (38) 同右、二二五頁
- (39) 同右、二六一頁
- (40) 同右、二六一頁
- (41) 『反故裏書』（『真宗聖教全書三、歷代部』）九八三頁
- (42) 同右、九八三頁
- (43) 同右、九八三頁
- (44) 同右、九七九頁
- (45) 同右、九七九頁
- (46) 同右、九七九頁
- (47) 同右、九八〇頁
- (48) 同右、九八一頁
- (49) 同右、九八一頁
- (50) 同右、九八一頁
- (51) 書狀（『真宗史料集成』第二卷）三二〇頁